

鞠清遠著

唐宋官私工業

支那に於ける歴史研究が一時華やかであつた方法論  
社會發展段階に關する論戰が殆んどその影を洩し、之  
に代つて實證的文獻學的研究が盛んに行はれる様にな

工業、家庭工業と莊園及寺院工業とは何れもその性質相類似し、かく綱目を分つことによつてその内容を甚だ曖昧にしてゐる。然しこの私工業を考察するに當つて官吏資本、商業資本との關聯についても注意してゐることは多とすべきであらう。次に私工業製品の賣却の形式を市場交易・門市交易・定貨・批發の四種に分つて考察し、次いで流動資本の回轉について述べてゐるが、それは單に流動資本の流通過程の考察に止まり、商業資本、官吏資本との關聯については之を意識的に問題としてとりあげてゐない。第五章に於ては採冶工業・鑄錢工業等各種工業とその生産地域について一般的な敘述を試み、第六章に於ては工業的行會について我が國の加藤博士の論文を參考としつゝ述べてゐる。此に於て氏は簡單に「長安志」に見ゆる「東市二百二十行」と「入唐求法巡禮行記」の「十二行四千餘家」を結びつけて唐代長安に於ける行數と行家數を算出し、之を宋代汴京に於けるそれらと比較してその減少したことを推論し、その原因についてまで論じてゐるのであるが、之は今一應考へて見る必要があらう。

以上本書の内容を極めて簡單に紹介したのであるが

著者が第一章で「我們不想預有成見。我們不預擬唐宋的社會形式、我們不預擬唐宋時代的工業的任何情況、我們儘量排比事實。在事實、例證允許我們的範圍內、我們尋繹結論、我們尋繹關於工業的各方面的結論。」と言つてゐるのは最も其研究態度と本書の内容を明瞭に示すものである。從來のともすれば事實を公式に當嵌めんとする態度とは逆に事實を排列してそれから歸納的に結論を導き出すとするのであつて、この著書の研究態度は本書の至る所にあらはれてゐる。然しながらその結果は、著者が工業に關するあらゆる史料を蒐集し、之を機械的に分類排列した觀がないでもない。従つて意識的に問題をとりあげて論ずるのでもなく、その敘述は甚だ抽象的であり、常に之を當時の社會狀態と關聯して考察することを忘れてゐる。之が本書のもつ最大の缺點とさるべきであらう。更に「唐宋官私工業」と題してゐるが著者は餘りにも唐代の敘述に力を用ひ過ぎ、寧ろそれよりも重要であり又史料も多いであらうと思はれる宋代に關説する少きは甚だ遺憾とする所である。

以上本書の内容の概説とその批評を試みた次第であ

るが、未だ我が國にも彼の國にもかゝる問題に關する專著のない今日、史料も豊富に蒐集されてゐる本書は少くとも今後の研究に對してロー・マテリアルとしての價値を有するものであるを信じて、支那社會史に關心をもつ人士に一讀をおすすめて度い。

尙本書の姉妹篇として兩宋田賦制度、中國中古的田賦制度(劉道元)、中國行會制度史(全漢昇)のあるを附言しておく。

(四六版、一九六頁、民國二十四年一月新生命書局發行、定價五角)  
(北山康夫)